

学外演習における保育内容「環境」に対する保育学生の学びの一考察

— 教職実践演習の取り組みに着目して —

山田 朋子¹⁾

Early childhood care and education, an environment for infants in which college students learn by practice: Focusing on practical exercises of those in the childcare and teaching professions (kindergarten)

Tomoko Yamada

1. 問題の所在：保育教職実践演習による検証の意義

本学の教育学部（以下、本学）で幼稚園教諭免許と保育士資格を取得するために行われている4年制の「保育・教職実践演習（幼稚園）（以下、教職実践演習）」は、幼稚園教職課程および保育士養成課程における4年間の指導の集大成として「教員として最小限必要な資質能力」が形成されたかを確認し、その定着を図ることをねらいとする大学必修の科目である。本学の科目「教職実践演習」は、担当者4名がそれぞれの専門領域に関わる内容から、教員の資質能力の向上に向けた形成を確認するため、オムニバス形式により演習を行っている。到達目標には以下の4点が設定されている。

1. 保育や教育に対する使命感や情熱、ともに成長するという姿勢や高い倫理観、自己研鑽の姿勢をもっていることを説明できる。
2. 保育者・教育者としての職責や義務に基づき、他の教職員との協力・連帯能力保護者対応の基本的な行動を実行できる。
3. 幼児に対する受容的な態度をもち、発達や心身の状況に応じた子ども理解や評価・支援することができる。
4. 保育者・教育者としての基本的な表現力をもち、子どもの状態に合わせた指導計画編成・指導を行うことができる。

筆者は到達目標「3. 幼児に対する受容的な態度をもち、発達や心身の状況に応じた子ども理解や評価・支援することができる（以下、到達目標3）」を担当する。1回に担当する1グループ約30名の保育学生に到達目標3のテーマ

となるキーワード「保育者としての受容態度、子ども理解、評価・支援能力の確認」を示し、3回の演習に取り組む。具体的な演習内容は、園行事として「〇〇の親子遠足」の指導計画を立て、約10名ずつ保育者、園児、保護者役に扮して遠足を実施する。さらに実践後に保育内容を自己評価と第三者評価によって到達目標3に基づくテーマの省察に取り組むものである。

前述したように、この科目は4年間の集大成であることから、保育学生は指導計画を立案し、親子遠足を実施する際に、幼稚園教育実習や保育実習の経験をもとに、検討や実践および振り返りに取り組むことになる。これはカリキュラムマネジメントに求められる基礎事項をふまえた理論に基づいた実践であることが考えられる。教育実習や保育実習は実践と理論を融合する場であり、当然ながら総合的な学びの場として保育学生自身も子どもや保育者、園環境など様々な視点から知識と経験の融合を図る意識をもった保育への理解が総合的に深まりやすいことは自明である。

実習の学びの検証について教育実習や保育実習に関する様々なアプローチにより、研究が展開されている。特に保育記録に着目した実習の在り方の検証は多岐にわたる。例えば井口（2012）は、幼稚園実習日誌の指導法を時制から検証し集団の総体的な姿を「現在形」個々の姿や保育者の援助のエピソードを「固有名詞」「過去形」を交える2つの視点で記述する指導法の提案を行っている。

また保育記録の新たな取り組みとして岩田・大豆生田・鈴木・田沢・田甫（2019）は、保育者と実習生が「共に考えていく」関係になりやすくするツールとしてドキュメンテーション型実習日誌示し、さらなる支援の在り方の課題

執筆紹介：¹⁾ 中村学園大学教育学部教児童幼児教育学科

別刷請求先：山田朋子，〒814-0198 福岡市城南区別府 5-7-1, toyamada@nakamura-u.ac.jp

を述べている。

加藤 (2020) は保育所実習事後レポートに焦点をあて、テキストマイニングにより質的検証と比較を行っている。保育実習で園児から様々なことを保育学生は学んでおり、実習経験を重ねて語る「軸」ができていて、学科のディプロマポリシーに掲げる項目を達成するものとして保育所実習が有効との結果を導いている。

このように保育学生の多様な実習園での異なる実習経験による学びを、保育記録から検証し、エビデンスを示す研究が進んでいる。

一方、実習園の保育内容が様々に存在し、実習園の保育者や子ども、受け入れ状況の環境が異なることから全保育者が統一の実習方法で同様の経験をするのは難しい。そのため実習評価票による実習成果の比較が難しい実習課題が内包する (山田, 2015) といえる。

保育の領域に該当する科目による知識として蓄積されたものを、大学の科目で総合的に実習以外の科目と実践を結び付けた学びとして修得し学んでいるかを確認できれば、保育学生同士が共通の課題と成果をより深く共有できるのではないだろうか。平成 30 年改訂の幼稚園教育要領や保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領に記載されるカリキュラムマネジメントに基づいた 20 の基礎事項を筆者が集約した表 1 に照らし合わせることで、保育学生にも実践と理論の照合が可能なることが考えられる。

表 1. 指導計画立案に関わる基礎事項

1	子どもの姿 発達過程	9	子育て支援	17	異文化理解 (外国人保育)
2	ねらい	10	行事	18	法的根拠
3	主な活動	11	食育	19	早朝保育、預かり保育、延長保育 一時保育、休日保育、病後児保育
4	予想される子どもの姿	12	季節		
5	環境の構成	13	天候	20	教師の5つの役割 (保育者の資質)
6	保育者の指導上の留意点	14	実態理解 (園・地域・家庭)		
7	反省・評価	15	特別支援教育 統合保育・障がい児		
8	次の指導計画への課題	16	連携 (小学校・家庭・地域)		

さらに図 1 は、表 1 に基づいて、教職実践演習で保育学生が話し合い、指導計画を作成し、実践、振り返りの一連の取り組みにおいて他の科目もふくめ総合的に触れるであろう、保育の内容を図にまとめたものである。

本研究の目的は、実習科目以外の演習科目となる「教職実践演習」を取り上げ、他の科目で学ぶ知識や技術を総合的に活かした実践を行うことができているのかを明らかにすることである。その視点として、保育学生が授業 3 回目に省察する到達目標 3 を基に行ったグループ討議の内

容によるプレゼンテーション記録や、個人レポートに表出したものを分析する。特に筆者が担当する園外保育の模擬演習を実践することから、幼稚園教育要領解説で示される保育内容「環境」に関する事物や事象、用語を抽出し、保育学生が得た学びに焦点を当てることとする。

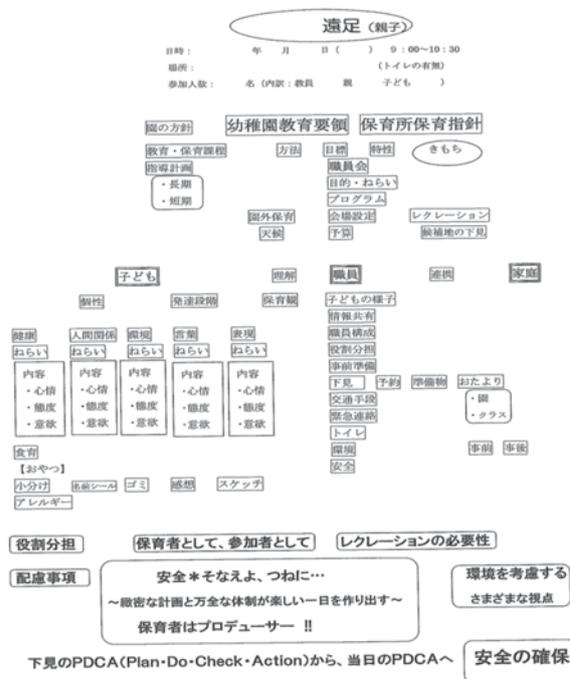


図 1. カリキュラムマネジメントに求められる基礎事項確認図

1.2 科目「保育教職実践演習 (幼稚園)」における到達目標 3 の演習計画の内容

具体的な授業の構成について整理をする。

1 担当者が 3 回演習で完結する一連の取り組みを 4 度繰り返すオムニバス形式で展開される。

到達目標 3 に基づき、各回の取り組みの意図と具体的な内容を以下にまとめる。決定するための方法や人数配分などの決定権はすべて保育学生に委ね、主体的に取り組む中で総合的に保育に関する知識や技量を発揮することを目指すものである。

■第 1 回 職員会議による指導計画

授業内容説明のオリエンテーションと職員会議の場を模して以下の内容による話し合いに取り組む。

第 1 回授業の目的は担当 3 回の授業計画を説明し見通しをもたせることである。説明内容は、担当授業の到達目標、授業方法、各回の具体的な役割と流れ、課題内容の説明、演習テーマ「〇〇の親子遠足」、演習実施候補地の提示、保育者・園児・保護者の役割分担とパーソナルデータの検討、第 2 回授業に関する諸確認と第 3 回振り返り資料となる映像に関する説明と承諾、第 3 回授業の内容確認、班別での振り返り、第 3 回終了後のレポート課題につ

いてである。

■第2回 実践

対象となる4班の「〇〇の親子遠足」に関する実践の概要を表2にまとめて示す。

表2. 「〇〇遠足」指導計画の実践概要

目的地	交通機関	交通費	設備	トイレ	住所	その他
①福岡市科学館	地下鉄六本松	¥210	社会見学	〇	中央区六本松4-2-1	地下鉄徒歩5分
②梅林緑地	地下鉄梅林1	¥260	10596㎡	〇	城南区梅林3-22	地下鉄徒歩3分
③七隈緑地	徒歩11分	なし	9700㎡	なし	城南区七隈1-11	
④別府北公園※	徒歩5分	なし	1204㎡	〇	城南区別府3-13	※印は、児童公園の近隣への苦情対策のため、大学を出発し該当公園内を見学後、大学敷地内へ戻り、レクリエーションを行う流れとなる。
⑤別府公園 ※	徒歩3分	なし	1438㎡	なし	城南区別府4-2	
⑥鳥飼南公園※	徒歩8分	なし	816㎡	なし	城南区鳥飼6-12	
⑦田島グラウンド	徒歩30分	なし	野球soccer	〇	城南区田島1-2-1	

■第3回 振り返りによる自己評価

保育学生全員で職員会議として、保育者、子ども、保護者の立場から園外保育の振り返りを行う。保育場面のコミュニケーションには、職員会や打ち合わせといった会議から、保護者との雑談と称される子育て支援まで多岐にわたる内容が含まれる。そこで担当教員がファシリテーターとなり時間を区切り、雑談、テーマ設定、保育記録、記録データの写真の4種類の異なる振り返りの方法を取り入れ、話し合いを進める場を提供する。この中で保育学生は、コミュニケーションによる実際の話合いの意図と異なる方法の特性を体感することになる。

教職実践演習は保育者養成の集大成として教員に求められる資質能力の形成を確認する役割を担うことから、教員は到達目標3の到達度を確認する課題に対して本研究で取り上げる保育内容「環境」に注視する発言を意図的には行わない。しかし、保育学生が園外保育を実施するために考え、話し合い、指導計画を作成する取り組みを通じて、カリキュラムマネジメントの基礎事項(表1)に示す内容に触れているはずである。そこで達目標3のキーワードをもとに振り返った話合いの成果として行われるプレゼンテーションや課題レポートの中に、保育内容「環境」の学びに向かう内容から、その意識と実態を確認できると仮定した。そのため本研究では、幼稚園教育実習や保育実習合わせた5実習合計50日におよぶ実習経験や4年間の総合的な学びから、本授業の振り返りの中で、保育内容「環境」に関する学びの抽出を行った。

第3回振り返り用の環境に関する映像資料を幼稚園教

育要領解説に示される環境に示される事物や事象の名称(表1)を参考に、第2回の親子遠足が展開される当日に担当教員が帯同し撮影後、データ作成を行う。特に植物や天候、本人が限定されない遠景での通りがかりの人の映り込んだ風景、交通状況、足元の道路状況など特徴的な場面を中心に時系列で撮影を行ったデータを参加学生全員で共有し、振り返りを行う。

2. 課題の設定

2.1 幼稚園教育要領に求められる保育内容「環境」をとらえることの難しさ

保育内容「環境」は、1989(平成元)年の幼稚園教育要領改訂の際、保育内容の5つの領域(健康・言葉・人間関係・環境・表現)の一つとして示されたものである。領域は、小学校以降の学校教育における教科とは異なった性格をもつ。教科の名称が子どもの学習内容を決め、教科ごとに学習の時間が設けられる小学校に対し、保育の場では、子どもの保育者が園生活の中で相互に関わり合いながら学習内容を組み立てていく。そして、子どもの活動は、領域ごとに行われるのではなく、総合的に営まれるものである。そのため保育者が、この子どもの総合的な活動を通して子どもに対して様々な働きかけをするときの視点として存在するのが5つの領域である。

幼稚園教育要領には保育内容「環境」において「周囲の様々な環境に好奇心や探求心をもって関わり、それらを生活に取り入れていこうとする力を養う」と述べられている。「周囲・好奇心・探求心・生活」が保育内容「環境」を学ぶ際のキーワードに挙げられ、環境は自己の周囲に存在する全てであると示されている。従って環境の定義は大変難しい。高橋(2018)は「子どもが自ら好奇心や探求心を発揮して関わる行動が生まれて接点をもつ。それは特殊な場面ではなく、日常的に営まれる生活に取り入れ役に立てる力が養われることで、周囲の様々な環境との関係性が複雑に関連し合い刺激や学びを得る」と述べており、人的環境、物的環境、自然環境、社会環境という大きな枠組みで説明されることが多いと指摘する。

そこで、実際に幼稚園教育要領解説(平成30年改訂)に述べられている環境とはどのようなものを示すのかをまとめる。

まず、幼稚園教育要領第2章には、環境の領域のねらい及び内容として次のように述べられている。

ねらいは、「心情」として(1)身近な環境に親しみ、自然と触れ合う中で様々な事象に興味や関心をもつ。「意欲」として(2)身近な環境に自分から関わり、発見を楽しんだり、考えたりし、それを生活に取り入れようとする。「態度」として(3)身近な事象を見たり、考えたり、厚かったりする中で、物の性質や数量、文字などに対する感覚を豊かにする。資質や能力を育むことを挙げている。

そのため、具体的な保育で取り組む「内容」として次の12項目が挙げられている。

- (1) 自然に触れて生活し、その大きさ、美しさ、不思議さなどに気付く。
- (2) 生活の中で、様々なものに触れ、その性質や仕組みに興味や関心をもつ。
- (3) 季節により自然や人間の生活に変化のあることに気付く。
- (4) 自然などの身近な事象に関心を持ち、取り入れて遊ぶ。
- (5) 身近な動植物に親しみをもって接し、生命の尊さに気付き、いたわったり、大切にしたりする。
- (6) 日常生活の中で、我が国や地域社会における様々な文化や伝統に親しむ。
- (7) 身近な物を大切に作る。
- (8) 身近な物や遊具に興味をもって関わり、自分なりに比べたり、関連付けたりしながら考えたり、試したりして工夫して遊ぶ。
- (9) 日常生活の中で数量や図形などに関心をもつ。
- (10) 日常生活の中で簡単な標識や文字などに関心をもつ。
- (11) 生活に関係の深い情報や施設などに興味や関心をもつ。
- (12) 幼稚園内外の行事において国旗に親しむ。

幼稚園教育要領に加え、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領が示す通り、保育の対象者は異なり保育実施上の相違は存在する。しかしながら保育内容「環境」の基本的な考え方は保育の場の種別の違いを超えて共通キーワードに「身近な環境・身の回り・日常生活・近隣」「興味や関心をもつ」「生活に取り入れていこうとする力」が挙げられる。

高橋 (2018) は、保育内容「環境」が目指すものとして「園生活の中で子どもが身に付けた周囲の環境との関わりを通した学びを、園を離れた」「子どもの“身近な環境”“身の回り”“日常生活”“近隣”に、子どもが“興味や関心”をもって“生活に取り入れて”いこうとする機会が十分に保証されている」ことの重要性を説いている。

そこで、文部科学省が例示する幼稚園教育要領の解説に記された領域保育環境に関する具体的な事物をまとめ、表 3 に示す。

幼稚園教育要領解説に記載されている、環境に関係した具体的な事物や事象は、だれもが保育者になるまでに一度は見たり、触れたり、経験している内容といえる。特に植物として挙げられている季節の草花や葉、落ち葉は、本授業が設定されている後期 9 月から 1 月の期間に、大学構内や、大学外の街路樹として対象保育学生が必ず目にする決して特殊な環境ではない。そのため保育学生の意識がどこに向けた親子遠足を実施したかを、プレゼンテーションの記録や課題レポートから読み取ることが可能になるといえる。

また、表 3 に示される保育内容「環境」の事例となる事物や事象と関わることで、子どもは表 4 に示す資質や能

力、経験を獲得することが述べられている。それは同時に保育学生にも、保育者として子どもたちが環境を通して経験し、身に付け成長するプロセスに関わる、人格形成の基礎作りに関与することを意識しながら、取り組むことが求められるといえる。

表 3. 保育内容「環境」に記載された具体的な事物や事象の名称

行事・祭り	植物	遊び	感じ方の変化	科学的な見方
正月の餅つき	育てた花	手紙ごっこ	木交じり	テレビ
正月を迎える行事	落葉	ごっこ遊び	水	シャワー
七夕の飾りつけ	季節の草花	風あげ	霧	放送内容
七夕の由来を聞く	木の芽	こま回し	石	川原
節句	花びら	用具	川原	文字
秋の収穫に感謝する祭り	春の草花	凧	芯	記号
地域の催し	実	紙飛行機	土	固める
太鼓のたたき方を見る機会	種	絵本	湿気とり	文字表現
文化・伝統	葉	ボール	生活	施設
国旗	木の実(どんぐり)	積み木	標識	トイレ
国歌	生物	紙の切れ端	グループ	高齢者福祉施設
国歌	蜘蛛の巣	食	学級	資料館
わらべうた	魚の体形	様々な国	交通	博物館
天候・事象	昆虫	地域	衣服	保育室
突風	ウサギ	おやつ配分	ポケット	
真夏の暑い日差し	人間の赤ちゃん	季節の食べ物		

平成 30 年改訂幼稚園教育要領解説をもとに筆者作成

したがって保育内容「環境」への学びの意識が向いた保育学生であれば、表 4 に示される資質や能力についての語りが話し合いや課題レポートに表出されていることが予想される。

表 4. 保育内容「環境」に記載された経験内容や獲得される資質・能力に関連した用語

性質	出会い感動する
仕組み	試す
物との関わり	心が癒される
自然に対する畏敬の念	好奇心
植物の生長	探求心
四季折々の変化	深める
季節の変化	気付く
感触	感じとる
同じものでも性質が異なる	世話する姿に接する
生活の仕方の変化	生命のすばらしさに感動する
水の感触の変化	生命を大切にする気持ち
大きさ	考え方の芽生え
美しさ	親しみ
不思議さ	楽しむ
地域や家庭の伝統的な行事に触れる機会	科学的な見方
物	愛情

平成 30 年改訂幼稚園教育要領解説を基に筆者作成

2.2 実習等における保育環境に関する学びとは

子どもにとって環境とは子どもが生きる中で関わるすべてとされる。子どもが見るもの、聞くこと、触れるもの、感じるもの、人的環境、物的環境、自然環境、社会環境という大きな枠組みで説明される。また環境に関わる子どもの状況を見ると個人や集団、年齢や個人の好みなどによって成長発達に関わり必要となる環境は異なる。さらに保育の中でいったん保育者等によって構成された環境が完成されたとする固定化や普遍的なものではなく、目の前の子どもが成長するために、興味や関心、成長に即した環境を見極め柔軟に捉え、臨機応変に再構成する変化を伴うことが生じると松本（2018）は説明している。

保育者養成校において保育者を目指す保育学生にとって、保育における環境構成を学び、理解することは幼稚園教育要領や保育所保育指針で求められる「環境を通した保育」を実践につなげる重要な課題のひとつである。保育学生は、この幼稚園教育要領（平成30年改訂）に示される内容を、大学の様々な授業を通じて理論として学び、学生生活や実習通して実際と関連づける過程を経て、知識として身に付け、実践を行うことになる。

例えば、テキストに記された「氷」の文字と、実存する固体を氷として認識できる知識を得るまでには一連のプロセスがある。保育学生自身が文字を見て事物を思い浮かべることができるのは、生活の様々な出来事の中で、見たり、触れたり、触ったりして蓄積された経験と用語、知識が結びつき、理解できていることで初めて、他者との会話の中でイメージを共有できる。このように得た知識を基に、実習中には、子どもから事物の説明を求められる場面で、言葉によって子どもに説明を行うことが可能となる。しかし保育学生が頭で理解できていることを、子どもの発達段階をふまえながら口頭で説明し、そのメカニズムを子どもの興味や関心に沿って説明したり、事前に子どもが主体的に学ぶ環境を準備する実践へ繋げたりすることは容易ではない。

一方、講義の説明では理解の難しいものが、保育環境に直接ふれて、経験することで、瞬間に理解しやすいこともある。または見学时に気にもとめなかったことが、人的環境として保育に携わり、保育記録に記載する取り組みの中で、突然腑に落ちることが生じる可能性もある。同じ保育環境に置かれた保育学生であっても、気づきの観点や内容も全員が全く同じになることはない。子どもと共有する生活の中の環境は、限定的でわかりやすい内容ばかりではないため、保育内容「環境」の理解には難しさを有するともいえる。したがって保育学生にとって環境は保育用語として瞬間的には理解しやすいが、実際に深めていくとどこまでも尽きることのない状態に具体的な説明が難しいものである。

しかしながら、実習園の環境について漠然としていたことが、目的意識をもつことで、取り組む内容の意図が明確となり、振返りの保育記録による考察をする中で、学びが

深まっていくことが松井(2018)によって報告されている。

また大神（2017）は、保育環境知識について実習段階の簡便な指標作成を目指し語想起課題の検討を行っている。結果、保育室課題で実習後の反応数が増加し、生成カテゴリーの違いに実習段階の違いが反映されたものと解釈された。

このような教育学の手法により同一対象者の追跡で繰り返し詳細な分析が可能となる一方で、その知見を実習経験やカリキュラムが多様な実習生での一般化の限界も述べている。特に文章での自由記述の文脈や子どもや保育者の立場による視点の置き方に関する判断の難しさを指摘している。実習の保育環境による学びの視点を担当教員が提供し、意図的に結びつける仕組みづくりが求められると言える。

2.3 保育教職実践演習（幼稚園）到達目標3に関する演習計画の概要

保育実践を保育者として振り返る内容は、各班で設定してよいことを伝え、保育学生同士の相談により決定する。

大項目として1. 計画内容の評価、2. 子どもの評価を提示する。例として1. 計画内容の評価を選択した場合には①準備と計画、②全体の流れとしてさらに、時間配分や内容、役割分担等に細分化したテーマを決めて話し合ってもよい、③その他としておやつをテーマにするなどより具体的に取り上げることでよりテーマ内容を深められることを伝えた。また大項目2. 子どもの評価は、④日常保育と行事の子どもの様子、⑤家庭での親子の様子の考察、⑥自然に対する興味や関心をテーマに話し合うことができると提案し、班で1つのテーマに絞り、話し合い、プレゼンテーションを各班5分程度で行うことを説明した。

このことにより園外保育で保育内容「環境」に対する意識が強ければ、⑥子どもの自然に対する興味や関心に対するコメントを取り上げることが推測される。

2.4 映像データ作成の対象物選定

教職実践演習を受講する大学4年制115名は4タームにわかれ、1教員が担当する3回連続の演習を実施する。

授業の達成目標3を実施するため、課題の提出及び教員が記録のためにデジタルカメラによる写真撮影を実施した。デジタルカメラによる写真映像は撮影者のタイミングと意図が存在する。本調査では、保育学生が見過ごす環境を意図的に静止画で撮ることにより、保育学生自身の視野と意識が向く傾向への気づきを促す目的がある。そのため、静止画の瞬間の表情や態度、状況が保育学生自身の意図と異なる映像となるデジタルカメラによるデメリットについて事前説明を行うこととする。

さらに、課題の提出時において保育学生たちには記述の内容を教職実践演習の効果測定のための資料とすることや、論文等による形式で記載内容について公表する可能性があること、その際には保育学生が特定されることがない

匿名性の確保に努めることを説明し、了承を得た。当然のことながら保育学生においても、幼稚園教育要領に明文化された環境内容だけで保育が求められているわけではない。しかしながら、子どもに関わるすべてのものを環境ととらえる領域の考えを修得するには、まず例示された事物や事象を手がかりに、一つずつ検討し、環境の捉え方を意識しながら保育を展開しながら、徐々に保育学生は環境に対するイメージが湧き、より具体的に自分の周囲に存在するすべての事物事象が保育内容「環境」の対象となることへの理解につながるプロセスがあると考え。同時に、保育内容「環境」以外に意識が強く向く保育学生であれば、卒業までに保育内容「環境」に取り上げられる内容を日常の中で意識する取り組みへの助言が必要となるといえる。

2.5 第1回授業の詳細と傾向

表5. 学生の役割分担決めの方法

第1回授業内容	
	役割決めの方法
1班	当日の席順で9名1班となり代表者がジャンケンで役割決め
2班	名簿順に9名1班となり代表者がジャンケンで役割決め
3班	名簿順に6名1班となり、班内ジャンケンで勝者がジャンケンで役割決め
4班	くじ引き

表5に示すように、半年後に保育者となる4年の保育学生であっても、主体的に保育者役に立候補をする班は存在しない。何かの方法で理由を得た役割を担うことを望む。ここには保育学生自身の集団により他者を意識しながら課題に取り組む受け身な態度が顕著に表れる。この方法により、3班が保育者、保護者、子どもの役割が決定し、さらに、役割で設定されている具体的な役割を決めるための班内のジャンケンが行われた。各班ともに90分の授業の中でこの段階に10分を要している。保育学生にとって行事の内容検討よりも、まず自分の担う役割の負担感をいかに軽減するかに時間を割く傾向がみられる。

表6. 第2回授業の班別詳細

第2回授業内容							
	実施日程	参加数	テーマ「〇〇の親子遠足」	目的地情報	実施状況	おやつ	レクリエーション
1班	9月26日	28	秋を感じよう!!親子遠足	別府北公園：徒歩5分、トイレ有、大学グラウンドでレクリエーション	前日に雨	なし	エビカニックス ボール送りゲーム
2班	10月17日	29	秋のわくわく親子遠足	別府北公園：徒歩5分、トイレ有、大学グラウンドでレクリエーション	直前に雨	200円	準備体操 親子電車リレー
3班	11月14日	28	秋っching親子遠足	梅林緑地：地下鉄と徒歩3分、トイレ有、現地レクリエーション	快晴、10分前に集合	100円	落ち葉探し どんぐりクイズ
4班	12月14日	30	今年ありがとう遠足	田島グラウンド：徒歩20分、トイレ有、現地レクリエーション	快晴、卒業論文提出10日前	100円	30分ボール運び 素敵なお友達

表6は第2回授業で各班が選択し、計画した遠足内容の状況である。第1回授業の話し合いが実施日程の1週

間前に行われる。その際には晴天で全く指導計画の話し合いには取り上げられなかった指導計画の基礎的事項(表1)に挙げられる13.天候の検討が生じている。具体的には目的、内容、目的場所もすべて雨天時のプログラムを用意することの必要性に環境の変化によってはじめて気が付くのである。1班は前日に雨が降ったため、急遽、体育館の利用申請をしたが、授業の都合で借用ができず、柔道室を利用することが直前に決定した。

このように、保育学生の意図では決められない環境の変化に対応することが保育では生じること、そのために、万が一を想定した指導計画が必要であることを、経験を通じて気が付くのである。このような学び方が毎回生じるわけではない。しかしながら、後期授業は、台風や晩秋による不安定な天候になることが多く、担当教員も同時に最終判断を行う必要が生じる。保育学生にとって指導計画の想定外が生じた時に、保育の学びの集大成やこれまでの人生における経験値による知恵と工夫と実践力が試される。そのため、担当教員は天候の不良を好機ととらえ、できるだけ雨天での園外経験を保育学生が選択するような働きかけを行う。

結果、第3回目の振り返り授業後の課題レポートでは、環境に関する捉え方に視点を置いた内容に触れる保育学生も表れる。詳細は2.7課題レポートに見る保育内容「環境」の捉えにおいて言及する。

保育教職実践演習は演習であるがゆえに、どの科目に焦点をあてて理論と実践を結び付けるかは、教員の意図が与える影響が大きいといえる。今後の課題として、演習とどの科目との結び付けを強化するとよいか、事前に学生のルーブリックによる科目の学びの習熟度から検討しておく必要があるといえる。第3回授業は、第2回に実施した親子遠足について話し合いによる振り返りと評価を行う。話し合いの資料として第1回目の議事録、第2回目の指導計画または園だより、いずれかをA4サイズ1枚にまとめて持ち寄る課題がある。その詳細を表7にまとめる。

90分の中で話し合いの方法を4つの方法「フリートーク」「課題設定による話し合い」「振り返りの参考資料を活用

2.6 課題レポートに見る保育内容「環境」の捉え

さらに分析を行った班の保育学生の最終レポートを一部抜粋する。第1回目の指導計画の中で検討した内容が、実践とその振り返りの過程で、本来、指導計画に求められる「一人ずつの子ども最善の利益に沿った」が目的となる保育内容がずれてしまったことへの気づきを有している。

(1) 事前に考えたことを実践して会議を行い評価してみると、下見をする際に子どもの安全に着目しすぎて周りの自然や道路標識について気づくことができなかつたと気づけた。保育者としてもっと子どもの視点になり、様々なことに気付く広い視野をもつことが大切だと感じた。

例えば(1)は下見の際に安全を優先しすぎたことにより、周囲の環境に気づくことに欠けたとの学びを得ている。

(2) 最初の話し合いでは時間がないからといった大人の都合でおやつをなしにして計画を進めていたけれど、子どもの気持ちを考えて改めて計画を練った時に、本当におやつがなしでいいのかと問い直すことが必要であることに気付くことができた。

(3) 「公園に到着することが目的になっていた」という反省が出たとき、その通りだと思った。なぜ公園に行き、そこで子どもがどのような影響を受け、成長につながるのかしっかり考えてねらいを定めたはずだが、いつの間にか保育者の仕事を失敗せずに完了できるかに目的がすり替わっていた。

(2)は、1回目の話し合いの時点で、保育学生は保育者役の友人がとりくみやすいように、準備をしないでよいと判断する、保育者の都合を優先した保育内容であったことに気づいている。

また(3)も、他の保育学生の指摘を受けて初めて話し合いの時に立てた目的に沿った実施のつもりが、目的地に到着する目的に変容していたことに気づいている。

(4) 遠足当日が雨であるとわかった時、私たちは一番に室内ですること考えを切り替えてしまったけれど、子どもたちは地下鉄に乗るのを楽しみにしていたかもしれない。雨の中、外を歩くことを楽しめるかもしれないなど子どもの気持ちを考えながら計画を立てると、けがをしないように室内でできることと限定してしまうことだけが子どもにとっての最善ではないと気づくことができました。もちろん、外でも安全に気を付けていくことができるように事前の下見や準備が必要になってきますが、その手間を省こうとすることがないようにしたいと思いました。

また(4)は子どもの最善の利益を尊重した保育を大前提に話し合いを進める中で、実践を「よりよくしよう」とする意気込みが、目的のずれを生じさせていることに気づけなかつたと、振り返りの省察を行ったことで気づきに繋がっている。第2回目の実践では、園外へ出かけるために子どもの命を最優先とする安全を守ることに終始徹底する傾向が強く表れている。これは保育者としての使命感の表れである。

しかしながら、「自然に触れ親しむ」ことを親子遠足のねらいに設定しているにもかかわらず、実際には安全に移動することへ意識が偏りがちな傾向が見て取れる。

(5) 「保育者役は公園に行くことが目的になっており、親子で手をつなぐ、自転車等が通るときには一時停止をするなどの安全配慮は十分であったと感じたが、それに気をもっていかれてしまい、周囲の環境に目を向けて、植物や虫など、子どもが身の回りのことに興味や関心をもつことができるような声かけができていなかったという反省があった。これは先生に撮っていただいた写真を見て気が付いたことであり、実際にやってみなければ気が付くことができなかったと思う。

(5)も(1)から(4)同様に目的がずれてしまったことについて言及しているが、その振り返りのずれに気づくために客観視できる視覚的事実が有効であったこと述べている。第3回目の話し合いや写真記録で客観視することにより、保育学生自身の視点の偏りに自ら気づきを得る。この3回の演習を通じて、様々な時期に様々な方法で、気づきをえることこそ、保育内容「環境」の捉えにくさを意識する手がかりにつながるといえる。

(6) 今回の活動は遠足だったが多くの園で様々な行事が行われている。親子でのふれあいの機会を設けるものや、生活発表会のように子どもの発達を見せるもの、七夕やひな祭りのように伝統や文化に触れるものなどがある。普段の園での生活とは違い環境の変化を伴う環境であるため、保育者の事前準備のシュミレーションが大切になってくる。保育者のやりやすいように活動を考えるのではなく、行事を通して何を子どもたちに伝えたいのか、大切にしたいのかを明確にして行事を進めていくことが求められる。

(6)は幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領の保育内容「環境」内容(6)で述べられている「日常生活の中で、我が国や地域社会における様々な文化や伝統に親しむ」ために、園行事を実施する意義と結び付けた学びを記している。このようにして保育学生は教職実践演習の中で、他の授業科目の学びを取り入れ総合的な理解へとつなげていることがわかる。

さらに保育学生の中には、担当教員の演習の意図を読み

解き、課題レポートに記載しているものも存在する。

(7) 2回目の授業の最後、先生は私たちを子どものときの気持ちに戻るかのように、「あの木まで走ってタッチしてきて」と声かけしてくださいました。そこで私は、保育において何が大切に気付くことができた。保育活動をするうえで一番大切なのは、計画通りに完璧に進めようとするのではない。子どもの目線に立ち、自分が子どもの立場ならどういう気持ちになるか、どんなことをやってみたいかに気付き、それを活動に活かしながら柔軟にのびのびと保育を發展させていくことなのだと考えることができた。実際、木まで走ったことによって木の下に落ちていた松ぼっくりを見つけ、それを使って新たな遊びを考え、楽しく時間いっぱいまで活動することができた。

(7) は、指導計画が予定時刻よりも早く終了したため、担当教員が提案したエピソードである。わずか3分程度の取り組みがこの保育学生にとっては、保育内容「環境」で得た知識と教職実践演習における実践を通して、「環境」に対する捉え方を飛躍的に成長させるきっかけとなったことが読み取れる。これは、様々な実習における学びに近い理論と学びの融合の場を大学の授業間で実施することの可能性を示唆している。

このように保育学生ひとり一人が、各科目と演習の機会を通して関連付けながら学ぶ機会を提供するために担当教員には、意図性と保育学生の学びの可能性を有した理論と実感を伴う体験を積み重ねていくことが求められる。

3. まとめと課題

保育学生はテーマに沿って考察したことを、話し合いや課題レポートを作成することを行っている。今回の課題レポートのテーマは「これからの保育者に求められる専門性について」を「子ども理解、評価、行事、保護者支援」のキーワードをもとにしたものである。保育内容「環境」で学んだ知識を有していても意識を向けるかどうかによって、表1や図2に示す指導計画の立案内容を実践で発揮することに繋がりがきれない保育学生の現状がある。この気づきこそが卒業後に保育者として保育の質の向上に寄与する課題である。

本研究では、達成課題3に関するレポートを、保育内容「環境」の視点から再度、読み直したことで領域に応じた学びを体験から考察し、求められた課題テーマに盛り込んでいることが明らかとなった。課題レポートは担当教員が担当科目についてレポート内容から到達目標をどの程度学んだかを読み取ることが本来の主旨である。しかしながら、本研究では、他教科における学びを確認する目的をもち読み取ることで、その科目の保育学生が教員としての必要最小限の資質能力の育ちを確認する一助になるといえる。

本科目で提示したカリキュラムマネジメントに求めら

れる基礎事項一覧を手がかりに、保育学生自身が指導計画の立案のために話し合いを重ね、保育を振り返るプロセスの中で、保育内容「環境」をどのように捉えていたのか、またその変容の比較から、保育内容「環境」の学びを検証することが今後の課題である。

引用・参考文献

- 大神優子「保育環境知識に関する語想起課題の検討(3) - 実習段階の比較 - 」和洋女子大学紀要第57集、pp75 - 85、2017
- 加藤朋江「保育所実習によって学生たちは子どもから何を学ぶのか - 保育所実習事後レポートのテキストマイニングによる検証と比較 - 」福岡女子短第紀要第85号、pp. 25 - 36、2020
- 厚生労働省『保育所保育所指針解説書』フレーベル館、2019
- 高橋貴志・米良秋子編著『コンパス保育内容環境』建帛社、2018
- 内閣府・文部科学省・厚生労働省『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』フレーベル館、2019
- 松井愛奈「保育における環境構成 - 保育実習との関連を視野にいれて - 」心理社会的支援研究創刊号、pp55 - 62、2010
- 文部科学省『幼稚園教育要領解説』フレーベル館、2019
- 山田朋子「幼保連携型認定こども園における教育・保育実習「自己・実習評価票」に関する試案」中村学園大学・中村学園大学短期大学部研究紀要第47号、pp. 31 - 43、2015
- 山田朋子「保育・教職実践演習(幼稚園)」に関するいい考察 - 親子遠足の模擬保育によるアクティブ・ラーニング - 」中村学園大学・中村学園大学短期大学部研究紀要第49号、pp. 65 - 75、2017